

弔 辞

いつも通りの日曜日が始まるうとしていた朝、一本の信じられない内容の電話で、後ろから頭を殴られたような感覚が体中を走りました。つい二日前の金曜日に話しをしたばかりの川邊さんが亡くなったという知らせでした。こんな残酷な別れがあるのでしょうか？人は、自分に訪れる死に対してそれなりに準備をし、周りもその人との別れに対して準備をします。天はそんな時間の余裕を全く与えてくれず、突然、川邊さんは我々の前からいなくなってしまうました。全く実感のなかった私は、翌日、川邊さんの家を訪ねました。そこには「ちよっと疲れて眠っているので起こさないで」というような感じの川邊さんが眠っていました。顔を覗き込んでみましたが、やつれた様子もなく、全くいつもの川邊さんでした。納得しようとしてもできない自分がいました。今、一週間たっても、何がどうしてこうなったのか、私自身、気持ちの整理がつかない心境です。私がこのような状態ですから、川邊さんを突然失ってしまったみどりさんの悲しみがどれほど大きいかと思うと、言葉がありません。

私と川邊さんとの最初の出会いは、もう三十年以上前になります。いつもブレザーを着て、きちんとしていて、どちらかというトバンカラな雰囲気、海洋物理の研究室の中では、異彩を放っていました。まだ学部

生だった私が研究室に質問に行くと、たった一人で蛍光灯をつけて、なにやら忙しくノートに書き込んでいる川邊さんの姿がいつもありました。「皆、麻雀に行ってしまったみたいだけど、何か？」といいながら、にこっと笑う口元がとても印象的でした。その頃すでに「黒潮研究の川邊」で確固たるステータスがあったのですが、博士論文の研究は対馬暖流でした。大学院に入って聞いた川邊さんの博士論文の発表は、浅学の私にもわかりやすく、その流れるような研究成果に感動し、あこがれました。どんな研究も起承転結をしっかりとする、現在も私自身が肝に命じている研究のモットーは、川邊さんのあの博士論文を聞いてから植え付けられたものだと思っています。

大学院では、とてもかわいがっていただきました。よくビールを一緒に飲みに行きました。川邊さんは、ビールを飲んでは、海洋物理の業界の評論と辛口批評を楽しそうに展開していました。最初のうちは、あまりにも切れ味鋭い毒舌に圧倒されるばかりの私でしたが、そのうち便乗して、二人で大いに盛り上がる「毒舌大会」を何回も楽しみました。川邊さんは、大のコーヒー党でしたから、毒舌大会の後には、決まってコーヒーでクールダウンしました。川邊さんの毒舌は切り口が鋭かったですが、不思議に嫌みがありませんでした。きつと、物事に対する基本的な感覚が私と川邊さんは似ていたからかもしれません。

私が北海道大学に転出してからも、よく電話をかけてきてくれました。一緒にプロジェクトの申請にも誘っていただきました。一九九四年の暮れに、海洋研究所に新設されたポストに来ないかと誘っていただきました。ちよつと尻込みする私を後ろから押してくれました。海洋研究所では、一緒に白鳳丸による長期航海もしました。長期航海の間、忘れられないのは、自宅で飼っていた病弱の猫がなくなったという知らせを受けて、私の船内居室で号泣していたことです。物事に動じることのない川邊さんの初めて見る一面でした。

本郷に移った私は、深海乱流の観測を始め、川邊さんは、深海の測流を始めました。二人の興味が交差したのが、深層海洋循環の湧昇域と目される北東太平洋の深海乱流観測です。投入した乱流計はなかなか浮上せず、結果的に、観測自体は失敗しましたが、そのリベンジ観測を今年の十月にやるので、是非一緒に乗船しようという年賀状をもらいました。実は、川邊さんが亡くなる二日前の金曜日に話していたのも、そのリベンジ観測のことでした。

まだまだやりたかった研究がたくさんあったらうに、志半ばでさぞ無念だったことだらうと思います。川邊さんの目指す研究のゴールがどこにあるのか、もっと聞いておけばよかったです。今となっては、一緒に研究することも、研究についてのディスカッションをすることもできなくなりました。そして何よりも、この多様化、国際化の時代、あるべ

き姿を目指して大学を引っ張っていかねければならない時に、頼りにするはずの川邊さんを失ってしまいました。残念でなりません。

川邊さん。長い間、本当にお世話になりっぱなしでした。これから私たちがどこまで川邊さんの分までできるかわかりませんが、いつも川邊さんに見られていると思って、そして、あの毒舌の対象にならないように、日々、研鑽していきます。さよならもいえずに、逝ってしまった川邊さん。本当にありがとうございます。どうか、ゆっくりとお休み下さい。

東京大学 大学院理学系研究科 教授

日比谷 紀之